

私が入から聞かれて一番困る質問がありません。

「何人ですか?」「どこの国の人?」

私は日本人のような外見に「ゲエンティ ホンハウ」という明らかに日本人でない名前を持つので、初対面の人は戸惑うらしいのですが、このように尋ねられると、どうも同じ質問を返したくなります。

「あなたは私を何人だと思えますか?」「どこの国の人だと判断しますか?」

私の経験から、どうやらベトナム人は私を「日本人」とみなすことが多く、日本人は私を(日本人にそっくりな)ベトナム人と認識しているようです。つまり、私に常にあてはまるのは「外国人」というカテゴリー。でも、外国とはいったいどこにあるのやら?

事実、私の持つ身分証明書は外国人登録証明書のみです。戸籍もなく、住民票もなく、外国人登録証明書の国籍等の欄にはベトナムとありますが、ベトナムのパスポートは持っておらず、日本国籍も取得していません。両親が祖国ベトナムを捨て、ポートピープルとして日本に逃げてきたために、現在私の家族はみなベトナム国籍を持たず、厳しい日本の難民認定の中で、難民認定の申請もできず(今ではもう手遅れでしょう)、日本に帰化することも難しく、日本で生まれ育ちながら一応、永住権を与えられ、ただ外国人として生きています。ここまでで、薄々察している、もしくはとつづくにご存知な方もいらっしゃるかもしれませんが、私は無国籍です。でも、はっきりと解ったわけではありません。なんせそれを証明するものなどなく、ただ無いことが証明。そこから無国籍という事実が浮かび上がるだけなのですから。

そんなわけで、「何人?どこの国の人?」という質問に「外人で、無国籍です」と答えるわけにもいかず、ずっと私は頭を悩ませてきました。だから、いつも仕方なくしっくりこない不快感を無視して、「日本人」または「ベトナム人」とおざなりに返事をしていました。でも本当は、ずっとこう言いたかった!「本当に知りたいのなら、私の話に付き合ってくださいませんか?ちょっと長いけど私だけのとおきの答えがあるんですよ!」

「自分は何者なのか」という疑問を多くの人はいつからか持つようになりますよね。私がそれを強烈に意識したのは十五歳、初めて家族とベトナムを訪れたときでした。それ以前、小学生のときは自然と日本人に同化しようとする「日本」というものに属したいと常に願っていたました。私の中にある「ベトナム人」的要素は、私を日本で生活しづらくするものでありませんでしたので、「ゲエンティ ホンハウ」という名前を名乗ったとたん変わってしまう相手の表情を私は常に恐れ、「国に帰れ」というクラスメートの言葉に傷ついては、「私は周りの子と違う、外国人なんだ。ここに居場所は無い」と思っていました。ですが、中学生になり、多くの理解ある友人に出会ってからは「みんなと違う私を好きになりたい」と願うようになり、まだ知らぬ両親の祖国、ベトナムに思いを馳せ「きつとそこは私の国でもあるに違いない、私の故郷、居場所があるかもしれない」と思っていました。

そんな想いとは裏腹に念願の初のベトナム訪問は見事に私の理想・幻想を壊し、現実を突きつけてくれました。自分の国、親戚たちとの初体面、見慣れぬ美しい風景に浮かれる私をよそに、その旅行中、ベトナムは私にと

つて遠い国であり続けたのです。みな、私を「外国人」または「越僑（外国に住むベトナム人を時に皮肉を込めて、差別的に呼ぶ言い方）」と見なし、その上、人との意思疎通はうまくいかず、理想の故郷であつたはずのベトナムは結局私の知らない国でしかありませんでした。

心に描いていた居場所さえ失つたと感じた瞬間、上も下もわからず、暗闇を落ちていく感覚の中で私は何がなんだか理解できずに泣くことしかできませんでした。このときはまだ、自分が無国籍という事実を知りませんでした。自分が、実質的に私は国というものを持たない、どこかで失つてしまったということがわかったのです。そしてはつきり悟ることを恐れて、たくさんのものを責めて、でも何を憎んでいいのかわからず、すべてから逃げようと思いました。

「日本に帰ろう。そして、ただ静かに暮らせばいい」

そして、高校一年生のときスタディツアーでフィリピンに行こうとしたとき、自分は書類・証明書の上でも自分がどの国籍も持たず、一度日本を出た後、帰ってくるにも再入国許可を必要とすることを知りました。このことがベトナムで感じた居場所がなく漂う感覚を、事実として裏付けることになったのです。

それからまた一年、高校二年生になり大学進学を考えながら自分が何を求め、学びたいかを探していたとき、山梨で行われた多国籍者の集まりに参加しました。その中で私はベトナム人のグループに入りましたが、その中にいても、他の人が話すベトナム語は聞き取れるのに、私が話す番になると日本語になり、通訳の人が入るという状態で、そこにいる自

分に違和感を覚えずにははいられませんでした。グループの特にベトナム語を話す人は私をどう見ているのだろうかと不安で、やはりここに私は属していないのだと痛切に感じました。自己紹介でもなんと自分を伝えたいのか分からず、私は何者なのか自分でもわからないという漠然とした恐ろしさが八方から迫ってくるようでした。

そこに追い討ちをかけるように、最終日にみんなの前でベトナム語で簡単な発表をする役目を与えられ、抵抗しきれず、結局、前日の夜にベトナム語音読を特訓することになりました。次の日、緊張と戦いながら読んだベトナム語は、とてもたどたどしく、参加していた日本人の人に「もっと勉強しなくちゃね」と言われる始末で、一晩の努力空しく情けない結果でした。

でも、今思えばあれが大きな転機だったのです。「このまま不安で怖がってばかりで情けない姿で終わりたくない、このままでは私は一步も先に進めない。」と、腹をくくって私は覚悟を決めたのでした。

それから半年後、二年前に私が逃げ出した現実をはつきりと直視し、前に進むために、私は高校を休学して一人ベトナムに飛び立ちました。

六ヶ月、私はベトナムの伯父の家に居候しながらベトナム語の勉強をし、三ヶ月経つと夜間学校に通うようになりました。新鮮な体験、たくさんの出会い、嬉しい出来事、直視したくない現実、堪えきれない孤独、ただ過ぎていった時間、すべてひっくりかえり、とても豊かな半年だったと今は言うことができず。ただ、始めは「この半年で私は失ってしまった故郷を取り戻せるだろう。二つの国に根を張ってこれからも伸びていけるだろう」

と信じて旅立ちましたが、実際、その半年で私が分かったのは「私は国という故郷・居場所・より所を失ったのではなく、もともとそんなものはなかったのだ」と言うことでした。私は形のないものずっと求めて、内に幻想を作りつつけていた弱い自分を直視することができたのです。私が十五歳のときに逃げ出したのはそんな自分からだったのだと今はわかります。

それを知ることで、国で限定することのできない、自分を本当に支えてくれていた人々、想いが宿る恋しい風景を大切にしたいと思うようになりました。そして、それが私の内なる居場所であり故郷であってくれるのです。

束ねられ、組み込まれ、同化していきながら、それでも残り、消えることのない「自分」という存在。この「アイデンティティ」と呼ばれるものについて、私たちはついどこかに属さなければならない、国や土地に根本をなさなければならぬというイメージを持ってしまいます。

それを与えられなかった私は自分で選び取り、信じて、肯定しなければ前に進み生きていけませんでした。そして今でも強烈に自分を叫ばなければなりません。でも、だからこそ、誰よりも叫ばなくとも存在できる揺ぎ無い自分を、叫ぶことのできる声を自分は与えられたのだと、信じることができます。

現在、私のように日本で生まれ育ったのに外国人と呼ばれてしまう子供たちがたくさんいます。彼ら彼女たちはどのように育ち、どう生きていくのでしょうか。私のようにあるとき気が付き、戦うかもしれないし、ただ外国人として生きていくかもしれない、故郷を探しつづけるかもしれない……。私は、私たち一人ひとりがそんな子供たちを、国や何か

のカテゴリーに分けてではなく、その子供自身を、それぞれの独特なアイデンティティを見つめ、見守ってくれるような存在であれば、と願わずにはられません。

グエンティ    ホンハウ